

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.36

発行 2000. 3. 31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 樋渡 昭 範

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

印刷所 株式会社 三光・伊万里市

開館20周年記念展特集



いろ えもんしょうもんざら
色絵紋章文皿 館蔵資料

肥前・有田窯

1700～30年代

口径 21.5cm

高さ 3.3cm

高台径 12.2cm

見込中央に染付と上絵付の赤・金でヨーロッパの紋章を描き込んでいる。この紋章はオランダのプーレン家の娘イダ・マリアとブレデローデ家の息子ジョアンとの結婚（1702年）によって生じた紋章であるといわれ、アムステルダム国立博物館にも同類品が収蔵されている。染付の発色はにじみがあるが、上絵付は繊細でいかにも注文品らしい入念さで描かれている。裏面は無文で高台内にハリ目跡が3個残っている。

開館20周年記念展のお知らせ

佐賀県立九州陶磁文化館開館20周年記念展

「古伊万里の道」展

The Voyage of Old-Imari Porcelains

趣 旨 肥前磁器（古伊万里）は17世紀初頭に日本で最初の磁器として誕生しました。

その後、有田皿山を中心に急成長を遂げ、およそ40年後の1650年代になると中国磁器に代わって海外輸出を始めました。めざましい技術革新によって1659年に始まるオランダ連合東インド会社からの大量注文にも応え、東南アジアからヨーロッパにまで運ばれることになりました。

肥前磁器の海外輸出は、17世紀後半から18世紀初頭にかけて最も盛んでした。この時期に輸出された肥前磁器の数量は記録に残っているものだけでも370万個以上といわれています。

このように肥前磁器は江戸時代において我が国が誇る輸出産業だったのです。

平成12年（2000）は開館20周年に当たることから、本展覧会ではオランダ連合東インド会社の船舶の終着地オランダにおける肥前磁器に焦点をあて、日本とオランダとの陶磁器を通じた交流の歴史を紹介いたします。

また平成12年（2000）は、慶長5年（1600）にオランダ船リーフデ号が来日して、ウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステンが外交・貿易顧問として厚遇され、外国の国情を知らせて以来ちょうど400年目に当たり、日本とオランダとの交流が注目される年でもあり、本展覧会は時宜を得た催事と考えられます。

主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・2・3展示室会 期 平成12年（2000）10月3日（火）～12月3日（日）
※会期中は月曜も開館（休館日なし）

観覧料 大 人 620円（510円）

大学生 300円（200円）

* 高校生以下は無料 （ ）内は団体料金

会期中に「日蘭交流400周年記念・開館20周年記念おらんだ茶会」を開催します。

主な出品先 アムステルダム国立博物館、フロニンゲン博物館、プリンセスホフ博物館（オランダ陶磁博物館）、アムステルダム歴史博物館、アムステルダム考古局、アムステルダム国立海洋博物館、ハーグ国立古文書館、メスタッフ美術館のオランダより全8館、ほか日本国内より出品

出品点数 約300点

展示構成

A. オランダ連合東インド会社と航海

（約30点）

作品：海洋画、地図、船舶模型、連合東インド会社本社屋（写真紹介）、インドネシア里帰りの肥前磁器（写真紹介）、南アフリカ共和国沈船引き揚げ遺物（写真紹介）



アムステルダム港（アムステルダム国立海洋博物館所蔵）
レイニーア ヌームス画（1650年頃）

B. 最初期の輸出

（1659年の記録をもとに構成）（約15点）

1659年のオランダ連合東インド会社送り状
（ハーグ国立古文書館所蔵）

C. 特別注文製品

(特別の注文があったことを示す) (約30点)

作品：ブロンク皿、紋章文入り製品、イニシャル入り製品、VOCマーク入り製品



染付花卉文角瓶 (VOC銘入)
(アムステルダム国立博物館所蔵)

D. ヨーロッパ需要製品—生活への浸透を示す—

(約80点)

作品：風俗画パネル (写真紹介)、静物画 (写真紹介)、サービスセット、ワインジャグ、調味料セット、文房具など

ヨーロッパの金属器、デルフト陶器、ライン炔器との比較



色絵花鳥文サービスセット (フロニンゲン博物館所蔵)



色絵唐草文インク壺 (フロニンゲン博物館所蔵)

E. ヨーロッパ需要製品 —主に鑑賞と東洋趣味作品— (約80点)

作品：蓋付壺、大皿、鉢、瓶、人形、磁器の間パネル (写真紹介) など



染付花文牛置物 (フロニンゲン博物館所蔵)

F. アムステルダム出土の肥前陶磁 (約30点)

作品：アムステルダム出土陶片、アムステルダム市街 (写真紹介)



旧オランダ連合東インド会社本社屋
(現アムステルダム大学政治・社会学校舎) 写真紹介

G. 輸出向け製品の有田における生産 (約30点)

作品：有田古窯跡・赤絵町出土の輸出製品 (陶片)

H. 日本とオランダ伝世の、二枚の染付有田皿山職人尽し絵図大皿 (2点)

作品：染付有田皿山職人尽し絵図大皿

開館20周年記念「古伊万里の道」展 事前調査報告

藤原 友子

一昨年から準備を進めています「古伊万里の道」展の開催を、いよいよ今年の秋に迎えることとなり、九州陶磁文化館ではその準備が着々と進行中です。平成12年2月27日（日）から3月5日（日）にオランダへ、出品打ち合わせと作品の撮影の立会のために出張しました。訪問館は以下のとおりです。

1. アムステルダム国立博物館：陶磁器資料借用
(アムステルダム市 2月28日訪問)
2. アムステルダム国立海洋博物館：地図、絵画借用
(アムステルダム市 2月28日訪問)
3. フロニンゲン博物館：陶磁器資料借用
(フロニンゲン市 2月29日訪問)
4. プリンセスホフ博物館：陶磁器資料借用
(レーウワルデン市 3月1日訪問)
5. メスタッフ美術館：「染付職人尽し絵図大皿」借用
(ハーグ市 3月2日訪問)
6. アムステルダム歴史博物館：絵画、歴史資料借用
(アムステルダム市 3月2日訪問)
7. アムステルダム考古局：出土陶片借用
(アムステルダム市 3月3日訪問)

これらの博物館からの展覧会の出品に関して、昨年から話し合いを重ねていましたが、今回の訪問ではさらに細かな打ち合わせをすることができました。また、各博物館の協力によって、出品作品の再確認と撮影の立会ができたことは、いよいよ作品が九州陶磁文化館で展示されることを実感させるものとなりました。



プリンセスホフ博物館にて

写真撮影は、限られた時間の中、緊張した雰囲気で行われました。プリンセスホフ博物館は、オランダ唯一の陶磁器専門の博物館で、焼きものの写真撮影は慣れたカメラマンによる撮影でした。日本の撮影と異なる点は、作品の立体感を重視する傾向があり、また、

光沢のある素材であることを表現するということです。たいへん申し訳なかったのですが、日本では光った部分の文様が消えてしまうのが好まれないことを説明し、ライティングをさまざまに工夫して時間をかけて撮影していただきました。メスタッフ美術館での撮影は19世紀の名画が並ぶ展示室で行われました。この美術館は、ヘンドリック=ウィレム・メスタッフ(1831-1915)という画家の作品及び収集品を展示する美術館です。この画家は、当時、風景画家として成功した画家でした。この美術館も、裕福だった彼の邸宅をつくり変えたものです。バルビゾン派などの絵画の収集と同時に、メスタッフ氏は日本の美術工芸品も収集していました。この中に佐賀県重要文化財である「染付職人尽し絵図大皿」(有田町陶磁美術館所蔵)との姉妹作品が含まれています。「染付職人尽し絵図大皿」は展覧会で2枚同時に出品される予定です。さしずめ姉妹の再会ともいうべきでしょうか。この機会にぜひ2枚同時にご鑑賞いただきたいと思います。



(左)シンシア・フィアレ博士 (右)ヤンバート博士

最終日は、アムステルダム考古局の出品作品の確認中、レイデン大学史学科の博士で、オランダ連合東インド会社の膨大な古文書に精通しておられるシンシア・フィアレ女史が私たちを訪問してくださいました。考古局長のヤン・バート博士とフィアレ博士のお二人はおなじアムステルダムにいらながらも、この日が初対面でした。それでもお会いするなり、話が盛り上がり、古伊万里の輸出について盛んに意見の交換をなさっておいででした。お二人は「古伊万里の道」展図録に掲載する論考を執筆中です。バート博士の「アムステルダム出土の古伊万里」について、フィアレ博士の「オランダ連合東インド会社の記録にみる古伊万里」についての書き下ろし論考を展覧会図録に掲載します。いずれも最新の研究成果をもちこんだ内容ですのでぜひ楽しみにしてください。(当館学芸員)

「新収蔵品展」のお知らせ

- 期 間** 6月17日（土）～7月16日（日）
 第1期：6月17日（土）～7月2日（日）
 第2期：7月4日（火）～7月16日（日）
- 内 容** 今回は、水島コレクションをはじめとする寄贈作品、及び当館が購入した作品など平成11年度に新に収蔵した作品を展示します。展示作品は、唐津焼、初期伊万里、古伊万里、九州各県の陶磁器のほか、近・現代、中国、ヨーロッパなど約200点を展示します。

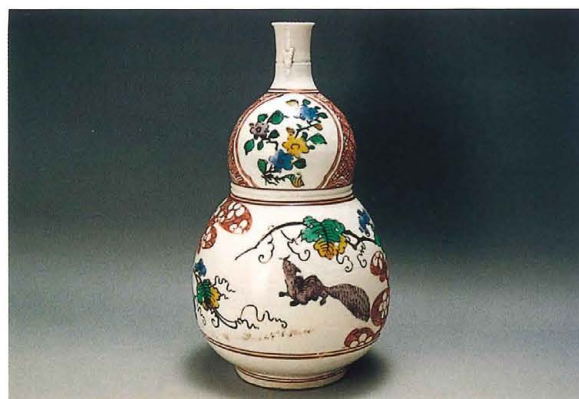
場 所 第1展示室



染付菖蒲文大皿 1820～1860年代
水島コレクション



叩き黒唐津耳付三足付水指 1590～1610年代



色絵葡萄栗鼠文瓢形瓶 五彩手 1650年代

ミニ企画展のお知らせ

昨年につづき、館蔵品や寄託作品によるミニ企画展を開催いたします。今年度は以下の2回を予定しております。

第5回テーマ展 「韓国の陶磁」展

- 期 間** 8月8日（火）～9月10日（日）
- 内 容** 日本の陶芸文化に関わりの深い、朝鮮の焼物を高麗時代から李朝まで紹介いたします。
- 場 所** 第1展示室

第6回テーマ展 「花文様」展

- 期 間** 12月12日（火）～24日（日）
- 内 容** やきものには様々な植物が描かれています。今回は、花文様の描かれた作品を館蔵品の中から集め展示します。
- 場 所** 第1展示室



青磁鍋連弁文筒形碗 韓国高麗時代 12～13世紀
満上コレクション



色絵岩菊牡丹文透台鉢 1680～1700年代

平成11年度特別企画展報告

「柿右衛門-その様式の全容-」展

平成11年10月8日の開会式から11月14日の閉会まで「柿右衛門」展を開催いたしました。

展示構成は、1 柿右衛門様式の作品、2 柿右衛門様式の国内出土陶片、3 歴代の柿右衛門作品を推測する、4 酒井田家の土型及び推測される作品、の4つのコーナーで、博物館や個人の所蔵品など国内48か所の当館館蔵品を加えた371点の作品を展示しました。特に、第1コーナーでは初めて公開される色絵人物文瓢形大瓶や広島県立美術館の色絵花卉文鉢、色絵馬置物、栗田美術館の色絵鸚鵡置物などの名品を中心に柿右衛門様式の典型作品からその周辺作品まで並べました。第2コーナーでは国内出土の典型的な柿右衛門様式を並べ、その出土例の少なさから、主としてヨーロッパ輸出品であったことを考えました。第3コーナーでは、酒井田家に縁のある古窯跡出土品とそれに一致する伝世作品を並べ、一般に柿右衛門様式の典型作品とされている作品が酒井田家の各世代に比べてみると4・5代頃であることを示しました。第4コーナーは酒井田家伝来の土型と一致する作品を並べ酒井田家の作品変遷を考えました。

今回の展覧会は、柿右衛門様式の問題を再検討するという一般にとってややかたいテーマも含み、その評価が気になるころでしたが、34日間の開催期間中13,856名の入館者があり、大好評のうちに終了することができました。

また、会期中の10月17日に「柿右衛門の世界」と題した14代酒井田柿右衛門氏による記念講演を開催しましたが、聴講者で講堂が満杯になる程の盛況ぶりでした。



「酒井田家の土型及び推測される作品」のコーナー

共催展・共催行事報告

田中 稔 大皿染付百選展

会期 平成11年4月1日～4月11日

口径30cm以上の染付大皿百枚を中心にした展覧会で、作者独自の大胆な筆致の作品が観覧者を魅了しました。10日間で2,204名の入館者がありました。



展示状況

第96回 九州山口陶磁展

会期 平成11年4月29日～5月9日

明治29年に有田陶磁器品評会として発足して以来、96回目を迎える本展覧会（第1部）に今回は100点の入賞作品が選考され、第1位である文部大臣奨励賞は、岩永範彦氏の「悠」が選ばれました。11日間の会期で5,676名が入館しました。



開会式のテープカット

第17回 新工芸西九州工芸展

会期 平成11年5月19日～5月30日

新工芸西九州陶芸部主催で行われる公募展の入賞作品発表会で、今年は招待作品4点を含む59点の陶磁器、染色、人形、七宝などの入選作品が一堂に展示されました。11日間で2,715名が観覧しました。

第9回 佐賀県陶芸協会展

会期 平成12年1月2日～1月9日

当館第1展示室において第9回佐賀県陶芸協会展が開催されました。今回は平成12年10月20日から平成13年1月14日まで開催予定の「大英博物館 佐賀県陶芸展」のプレイベントとしての位置づけで行われ、62点の意欲的な作品が一堂に展示公開されました。観覧者は、8日間の会期で1,762名でした。



会場の状況

第31回 有田工業高校卒業制作展

会期 平成12年1月25日～1月30日

県立有田工業高校のセラミック科、デザイン科生徒の卒業制作展で、今年は合わせて110名の卒業制作品を展示しました。6日間の会期で2,447名の観覧者がありました。

第18回 西松浦郡小中学校学童美術展

会期 平成12年2月15日～20日

当館第1展示室において第18回西松浦郡小中学校学童美術展が開催されました。今年も西松浦郡内の小・年・中・高・校6校の児童生徒の作品230点が展示されました。内訳は絵画32点、デザイン16点、線描19点、立体163点ですが、いずれも大胆かつユニークな作品ばかりで好評を博しました。連日家族連れが目立ち、6日間の会期中に2,104名の観覧者がありました。



小学生の立体作品

第11回 九州陶磁器デザイナー協会展

会期 平成12年2月29日～3月5日

九州陶磁器デザイナー協会（通称DAKT “ダクト”）のメンバーによる展覧会。今回は、「飯」をテーマに会員30名の作品約400点を展示。

6日間の会期で1,256名の観覧者を数えました。

第14回 有田窯業大学校卒業制作展

会期 平成12年3月7日～12日

県立有田窯業大学校の専門課程及び短期研修（上絵付研修、下絵付研修、ろくろ研修）の卒業生81名による卒業制作展。食器、照明、花器、インテリア、人形などの作品と釉薬の試験結果など約200件を展示。

6日間の会期で1,957名の入場者がありました。



会場の状況

第15回 有田陶交会展

会期 平成12年3月14日～20日

有田の窯元青年部による作品の展示。今年は「21世紀のプロローグ 有田焼職人達のニューパフォーマンス」と題したテーマで様々な作品が展示された。7日間の会期で343名の観覧者がありました。

第10回 九州近世陶磁学会

平成12年2月11日～12日の二日間、第10回九州近世陶磁学会が当館講堂を主会場にして開催されました。同学会は平成2年12月の発足以来、九州近世陶磁の諸問題についての研究発表の場として年々回数を重ね、今年は10回目の記念大会となりました。

今回の大会テーマは「九州陶磁の編年」として11本の研究発表が行われましたが、二日間で館内の一般観覧者と合わせると1,132名の入館者がありました。

また、第1展示室でこの大会に合わせた「陶片で知る肥前陶磁の編年」展も2月1日～2月13日の期間に開催され、12日間で2,496名の観覧者がありました。

シリーズ

やきものの技法 (31) イッチン

泥漿や釉薬によって盛り上げの線文を表す装飾技法。時にはその道具を指すこともある。イッチンの名称は、友禅染などで用いる一珍（一陳）糊に由来するという説がある。しかし糊の施し方からすると、やきものの手法との共通性は見出しがたい。むしろ染色という筒引き（筒描き）の技法と同類であるため、イッチンのことをやきものの分野でも筒描きと称している。

イッチンの技法は、イッチン盛り、イッチン掛けとも表される。また筒描きのほか、小石原焼（福岡県）や小鹿田焼（大分県）ではポンガキと呼んでいる。古唐津においては、黒釉に白い長石質の釉薬で装飾したものを素麺手と呼ぶことがある。さらに18世紀後半から19世紀前半にかけて、無釉地に黒釉と白い長石釉を波状に掛けた萩焼（山口県）の碗が作られているが、これを地元ではピラ掛けと称している。ササラで振りかける手法である。



飴釉櫛目波頭文瓶
小石原焼 19世紀

中国のものでは明時代の法花と呼ばれるやきものに、イッチンの技法が見られる。器胎に盛り上げの線文を描き、区画内に青や紫色の低火度釉を施した作品である。19世紀の偕楽園焼（和歌山県）などに法花の写しがある。西洋ではイッチンの技法によるやきものをスリップウェアと呼ぶ。17世紀から18世紀のイギリスのものには、黄土色と黒褐色の泥漿によるイッチン文様が描かれている。

イッチンの道具は渋紙製の円錐形の絞り出し式のものや、竹筒に注口をつけたものがあり、近年ではスポイトが用いられている。釉薬と泥漿では道具も異なると考えられるが、用いた道具や技法の検証が難しいため、盛り上げの線文様の装飾は釉薬の場合も泥漿もイッチンと総称している。（鈴田由紀夫）

シリーズ

やきものにみる文様 (31) ケンタウロス文様

皿の中央部に3人（頭）の半人半馬が描かれている。左のそれは、右手にむちのような剣をかざして持ち、頭から上半身にかけて熊とおもわれる毛皮をまとっている。そして他の上半身裸の2人（頭）に襲いかかる。中央のは上半身は裸で、右手にこん棒を持って防戦するように身構えている。右のも上半身は裸であるが素手であり、左のものから逃れようとしている。どうやら何か争っているようだ。

ケンタウロスは広辞苑によると「ギリシア神話で、上半身は人体、下半身は馬の形の怪物。テッサリアのペリオン山に住む。ラピテス族と争って滅ぼされたという。センタウル。」とある。テッサリアの伝説によれば、ラピタイ族の王ペイリトオスとヒッポダメアとの婚礼の宴の席で、酒に酔ったケンタウロス族のエウリュテイオンが狼藉をはたらいて花嫁を奪おうとした。このことが原因でケンタウロス族とラピタイ族の戦い（ケンタウロマキア）が生じた。

この伝説は古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語（メタモルフォセス）』にも記され、ケンタウロマキアは、ギリシア美術古典期（B.C. 6～5世紀）には神殿装飾に好んで採用される美術主題であったといわれる。この図はおそらくオランダ連合東インド会社によってもたらされ、このような図柄の皿を作ってほ



色絵ケンタウロス文皿
有田 1700～30年代 館蔵

しいと注文され、それに応えて制作されたものであろう。鎖国時代にあって、有田の絵付職人たちは、ヨーロッパの絵文様をいちはやく知ることができ、そしてそれを写すことができた。（吉永陽三）

利 用 案 内

開 館	9:00～16:30 月曜休館（祝日は開館） 年末年始の休館は、12月28日～1月1日
観覧料	無料（特別企画展は、その都度定めます。）
交 通	JR九州佐世保線有田駅下車徒歩約10分